小さいからこそできること。 人と人、島と都市をつなぐ読みもの。

Small Story in Kamijima

かみじま発 スモールストーリー

Oct. 2012
Vol.5

生名保健センターで行われた夕涼み会で、パンを販売する中川さん（右）、村上さん（左）、とも君（中）。
80個用意したパンは、わずか40分で完売した。

みんなが働ける島に

毎週土曜日、生名島の立石港にオープンするちいさなパン屋さんがある。店先には、手作りのパン、地元の野菜、特産物などが並ぶ。お店を運営しているのは、障がいを持つ子どものお母さん、お父さんたちで結成されたNPO法人「上島ポップコーンの会」。障がいを持っていても、生まれ育った島で働くことができる環境づくりを目指して活動されている。

上島町の人口は、約7400人。町内には、障がいを持った方の就労支援場所や共同生活の場はなく、島を出て、松山や今治で暮らす方が多くいらっしゃる。島の中で、障がいのある方が暮らすということはどういうことなのか。会長を務める中川理香さんと広報担当の村上由美さんにお話を伺った。

お話をきかせてくれた人

障がいを持つ子どもの親の会

NPO法人上島ポップコーンの会

会長　中川理香さん

松山市生まれ。ご主人の転勤で岩城島に引っ越し、以来16年間島暮らしをしている。家族は、夫、中３の息子。息子の智仁（とものぶ）君は、ダウン症だ。とも君は、車が大好きで、車に乗るととってもご機嫌になる。

広報担当　村上由美さん

生名島生まれ。一度島を離れるが、同じく生名島出身のご主人と結婚し、島に戻り、出産。家族は、夫、双子の息子と娘（高２）。息子の慶一郎くんは、脳性麻痺の障がいを持っている。シャイだけれど、実はギャグ好きという彼は、ポップコーンの会 産直市の店長を務めている。

会長を務める中川さん。優しい笑顔が人を惹きつける。

interview

町村合併を機に生まれた4島の親たちのつながり

―ポップコーンの会の活動内容を教えて下さい。

中川さん（以下、中）：障がいがあっても、上島町で育ち、働き、暮らせることを目指し、現在は主に3つの活動をしています。

1つ目は、町からの委託という形で、立石港務所の清掃業務を行なっています。10名ほどでシフトを組んで、元旦を除く毎日、港務所の清掃を行なっています。

2つ目は、障がい者の就労の場づくりを目的に、週に1度、せとうち交流館（町営施設）でパンづくりを行なっています。こちらは現在、ボランティアの方が手伝ってくださっています。

そして、3つ目は、そこで作ったパンを立石港務所などで販売する活動です。労働習慣を身につけたり、コミュニケーション能力や接客スキル取得のトレーニングを目的としています。

―現在、会員はどれくらいいらっしゃるのですか？

中：10名、7家族です。弓削、生名、岩城、魚島それぞれにいます。自閉症、ダウン症、脳性麻痺、アスペルガー症候群の子どもを持つ親が所属しています。

―会の設立の経緯を教えて下さい。

中：町村合併前の旧弓削町では、障がいを持つ子どもの親たちが月1回集まり、日頃の思いや子育ての悩みを話したり、相談しあう場が設けられていました。

平成16年10月の町村合併をきっかけに、行政側から声かけがあり、岩城、生名、魚島の親も参加するようになって、平成17年2月に「上島障がいを持つ子どもの親の会（ポップコーンの会）」が立ち上がりました。

「ポップコーンの会」という名前は、「元気にはじける親と子」という想いから、名づけました。

広報担当の村上さん。息子さん曰く、「元気すぎるほど元気」なお母さん。その明るさが人を引き寄せる。

―それまでは、岩城、生名、魚島ではそういった集まりはなかったですか？

村上さん（以下、村）：ありませんでした。私たちは、町村合併で一番良かったことはポップコーンの会ができたことだねと言っているんです（笑）。私が住む生名島には、うちの息子と同じ年代では障がいをもつ子どもはいませんでしたから。

ポップコーンの会ができる前は、「因島であいの家」（広島県尾道市因島）を利用する方が多かったと思います。

障がい者の就労支援や生活介護を行なっている場所なのですが、すぐ目の前でも、因島は広島県。県が違うということもあり、そちらにばかり頼れないということもありました。

中学卒業後の居場所がない！

村：上島町では、離島という地理的条件から、義務教育終了後の受け皿となる教育機関や働く場所がありません。そのため、中学卒業後は、今治や松山への通勤通学を余儀なくされたり、故郷を離れて遠い施設に入所しなければなりません。

学校に行っている間はいいのですが、学校を卒業して仕事がないと、生活のリズムが崩れてしまいます。毎日決まった時間に、決まった場所に行くことで、生活が安定するようになるのです。働く時間は長時間でなくてもいいんです。経済的に自立するというのはもちろんそうですが、そういう意味でも、働く場所があるという意義は大きいのです。

仕事をして知る喜び

村：立石港務所の清掃の仕事をしている女の子がいるのですが、この前、仕事はどうかと私が尋ねると、「楽しい！美味しいもの買って帰れるから！」と教えてくれました（笑）。

僅かではありますが、彼女たちはお給料をもらって仕事をしています。お給料がもらえる、自分でお金を稼いで、好きなものが買えるということがきっと嬉しいんだと思うんです。

また、掃除をしていると、「いつもきれいにしてくれてありがとうね」と声をかけてくれる住民の方もいらっしゃいます。自分の仕事が感謝されるって、とても嬉しいことですよね。また、そうして見守ってくれる地域の方にも感謝しています。

パンづくりをしてくださっているボランティアの方々。出来上がったパンは、自分たちの口には入る量がないほど、大人気だ。

—パンづくりをはじめたきっかけは？

中：子どもと何か一緒にできることがあればいいなと思って始めたのがきっかけです。お菓子は、種類によって工程が異なってきますが、パンは種類が違っても基本的な工程は変わらないので、障がいがあってもしやすいかなと思いまして。それで、福山の学校に通って資格をとりました。

—現在、パンを作っているのはどういう方々ですか？

中：お料理好きの地元の女性たち、6名が手伝ってくれています。今は、みなさんに覚えて頂く段階です。将来的には、今お手伝い頂いている方が先生になって、障がいのある人たちにパンづくりを教えていくことができればと考えています。

障がいをもった方が島で生きられるような「拠点」を作りたい

中：なるべく早く、障がいをもつ子どもたちが自立して、生活できる場を作りたいと思っています。働く場と、グループホームのような生活の場を備えた「拠点」を構えたいと計画しています。

働く場所については、どのような障がいを持った子でも、自分のペースで仕事ができる場をつくることが理想ですが、まだまだ思うようにはいきません。

障がいによって、むいていること、むいていないことが違ってきます。一人ひとりの能力を活かすことができればいいのですが、そのためには、スタッフの人数が足りません。「この時間までにパンを焼きあげる」「この時間までに掃除を終わらせる」など、決まった仕事を終わらせることで手一杯で、「できることだけ」という仕事の割り振りをする余裕がこちらにないのが現状です。

また、ありがたいことに、パンの売れ行きは良いのですが、利益を出していくということに関しては、まだまだ安定しない状況です。「毎日でもやってほしい」「もっとたくさん作って欲しい」と、嬉しい声をいただくこともあるのですが、作り手、売り手が足りないのです。

と、いろいろ試行錯誤中なのですが、そうは言っても、あんまりのんびりもしてられなくて、現在、村上さんの息子さんが高校2年生なので、あと1年半で高校を卒業して社会にでることにな

ります。それまでに、なんとか「拠点」の計画を具体化させ、完成の目途をつけたいと思っています。

青写真はあるのですが、資金面でも人材面でも、まだまだ足りないことがたくさんあります。けれども、動きは小さいですが、「できることから少しずつ。」そう思って活動しています。

村：順番で言えば、親は先に亡くなりますから、後に残る子どもが自立して生活できるようにしたいと思っています。子育ても大変でしたが、大きくなったと思ったら、その先のことがもっと大変でした（笑）。

先進地視察ということで、障がい者の方が就労されているパン屋さんなどに勉強に行かせてもらったこともあるのですが、どこに行っても強く感じるのは、「親の思い」です。自分が死んだら、この子はどうなるんだろう？その気持ちが強い原動力になっているんです。誰もやってくれないんですから、わたしがしなくちゃ！と思うんです。

「障がい」のなかの多様性

—「離島」という環境であるがゆえの苦労はありますか？

中：やはり人数が少ないことですね。町村合併により、「障がいを持つ子どもの親」という括りでは集まることができましたが、欲をいえば、本当は障がいごとに仲間が欲しいと思います。障がいによって、親の悩みや欲しい情報は異なりますので。

また、子どもたちができる作業やむき不むきも異なりますので、一斉に同じ作業をしたり、同じ場所にみんなで行くというのが難しかったりもします。

例えば、みんなで農作業をしようということになれば、足が不自由な子は参加できないということになります。活動内容を考えるというのも一苦労なのです。もちろん、色々な障がいを持った子が集まることで、多様性が生まれることが、逆に良いと思うこともありますが。

産直市の店長を務める、慶一郎くん。レジ打ちを担当している。

「だんだん慣れてきた。楽しい。」と、はにかみながら感想を聞かせてくれた。

お客さんからは、「けい君、がんばれよ！」の声も。見守ってくれる人たちがいてこそのお店。みなさん、ぜひ足を運んで、慶一郎くんを立派な店長に育ててあげてください。

外に出るというためらい そして、そこに広がる景色

―活動をするなかで、変わってきたことはありますか？

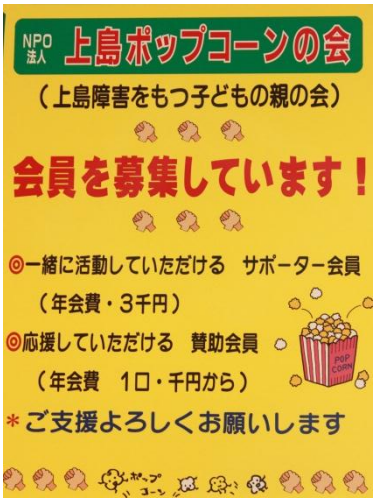
村：正直、最初は自分の子どもを外に出すということへの躊躇もありました。

私は、島生まれ、島育ちですから、やり易いところもたくさんありますが、やりにくい所もありました。自分では、子どもを外に連れていくことに対し、「ためらい」のようなものはないと思っていたのですが、10月の祭りのときに、何となく躊躇している自分がいることに気がつきました。その前、9月の運動会は平気だったんです。周りにいるのは、普段から息子のことを理解してくれている人たちだったからです。

けれども、祭りには、里帰りした友だちや先輩、昔から知っているじいちゃん、ばあちゃんがいるんですね。「また、ちょっと違う目で息子のことを見られてしまう」という気持ちが、無意識のうちに働いていて、自分でも驚きました。

自分の子どもが恥ずかしいというのではないんです。何と言ったらいいかわかりませんが、親にしかわからない感情ですね。この会に参加することによって、そういった躊躇がなくなっていったというのはあるかもしれません。

おしらせ



小さなコミュニティで 暮らす良さ

中：私は、他所から来た人間ですから、逆に一度外に出て知ってもらえれば、こういう小さなコミュニティで暮らすということは、暮らしやすいなと感じました。例えば、街のスーパーだと、息子に買物させるのは難しいと思うことが多いのですが、こちらのスーパーなら、息子のことも知ってくれているので、時間がかかったり、うまくいかないことがあってもトライさせてみようと思えます。その他にも、バスの運転手さんも事情を知ってくれているので、私が目を離した隙に息子が勝手にバスに乗ろうとしていたら教えてくれたということもありました。みんなが見守ってくれているという感じがします。

―そういう意味では、小さいコミュニティで暮らすというのは、大変な面もありますが、うまく回っていけば、障がい者の方にとっても暮らしやすい場所になるのかもしれませんね。

はい、そう思います。

上島ポップコーンの会

産直市

手作りパン(120円)
パンの種類は、
毎月変わります。

かみじまの特産品
生名味噌、
わかめ、ひじき、
芋菓子、鯛みそなど

毎週土曜日　10:00～14:00

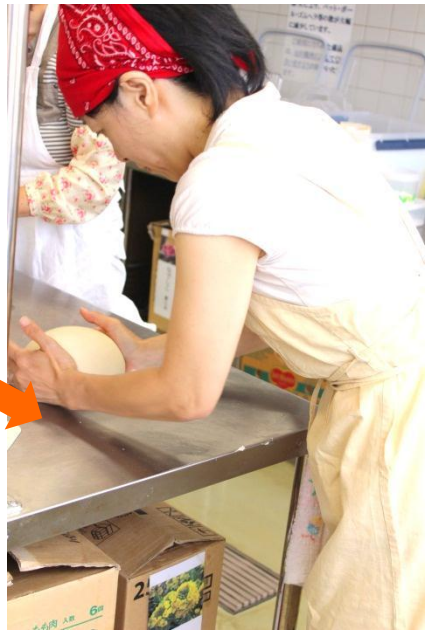
立石港務所内にて

手づくりパンって、なんでこんなに美味しいんでしょう！

ポップコーンの会の おいしいパンが できるまで

スタート

おいしくなぁれ～と、
愛情こめて、こねこね



おおきなまんまるにして、一次発酵
表面はツルツルつやつや、天使のほっぺじゃ

あんこちゃんたちも
スタンバイOK!

あんこを入れて、かわいいまんまるに
2次発酵させて、いよいよ焼きだろ！

ここで、ちょっとひといき
ティータイム。待つのも仕事です

ドキドキの焼き上がり
あ～、この香り！たまりません

できあがり～

編集後記

夢いっぱいのパン屋さん

こんにちは。気づけば、秋。島にやってきて一年を迎えようとしています。たくさんの出会いに恵まれて、とても「濃い」一年を過ごすことが出来ました。多くの方のご好意に甘えてばかりの島人半人前ですが、今後ともご指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、スモールストーリー第五号はいかがでしたでしょうか？（またまたご無沙汰してしまいました・・・すみません）

「障がい」ということに限らず、田舎で強い個性を打ち出して生きるということは、「根性」がいることだと思います。さらに、その個性を前面に出して活動していくということは、本当に「勇気」がいることです。今回、この取材を受けて下さったポップコーンの会のみなさまに、この場を借りて、改めて御礼申し上げたいと思います。

働く場所がないという問題は、障がいの有無に限らず、離島・過疎地を取り巻く深刻な課題です。ポップコーンの会の取り組みは、障がい者の方の雇用場所を創るというだけではなく、若者の雇用場所を創るという取り組みでもあります。

働く場所がなければ、「外にでるしかないか・・・」と諦めてしまうところを、「それじゃ、だめだ」と、行動を起こす、ご家族のパワーが、ポップコーンの会の原動力です。お子さんが障がいをもつことで、親御さんたちは「強くならなければならなかった」のかもしれません。しかも、「離島」という環境ということもあり、想像ならぬご苦労があったことと思います。けれども、自分が動かなければ何も変わらないのは、どんなことだって同じなはずです。

上島町には、パン屋さんがありません。手づくりパンは、市販のパンと味も香りも全然違います。だから、ポップコーンの会のパンは、大人気で、いつもすぐ売り切れてしまいます。つまり、ポップコーンの会は、すでに立派な島の人気パン屋さんなのです。島の人たちに必要とされている、島の貴重なパン屋さんなのです。

障がいをもった方が安心して働けるということと、島の人たちに美味しいパンを届けるということ。二つの「嬉しい」が重なって、一つの仕事が生まれようとしています。そして、この島のパン屋さんで、いつの日か、障がいを持つ方とそうではない人が一緒に働けたら、すごいことだなと思います。夢いっぱいの島のパン屋さん、ぜひ足を運んでみてください。

click 本誌のコンセプト

『スモールストーリー』が読める場所

【紙で読む】弓削総合支所、弓削港、町民プラザ、せとうち交流館、弓削商船図書館・寮、弓削高校図書室、弓削中学校、しまでカフェ、やよみ亭、立石港、岩城港、岩城中学校、よし正、尾道港

【ネットで読む】上島町島おこし協力隊のブログ　http://setouchi-k.town.kamijima.ehime.jp/blog/sima/

About ME

文と写真と編集

ふじまき　みつか　（まっきー）

1983年山梨県生まれ。A型。ふたご座。国際基督教大学卒業。山梨→東小金井→フィンランド→吉祥寺→上島町生名

都内マーケティング会社に勤務ののち、2011年10月より、愛媛県越智郡上島町（人口約7400人）の離島に移住。島おこし協力隊として活動中。

この夏の思い出：高井神島で、上島町の小中学生33名と「かわうそキャンプ」をしたこと。1泊2日のキャンプで、子どもたちはイスとモビール（飾り）を作り、高井神のみなさんにプレゼントしました。とっても上手にできたんですよ！高井神のみなさんも喜んでくれていました。来年はもっとみんなが楽しいキャンプにするぞー!!

click いいね！してください **facebook**

協力隊の日々をチェック **blog**

かみじまのことば

click

おらぶ

【意味】　大声をだす・叫ぶ

【用例】
「あの人は、何おらびよんなー」
（あの人は、何叫んでるんだー）

How do you think?
ご感想お聞かせください。
メール：fujimaki-mitsuka@town.kamijima.ehime.jp